



246号

2019/9

日中文化交流市民サークル「わんりい」
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



梅里雪山の里：成都を出発して6日目、連日の雨であきれてしまう。この日は「梅里雪山(雲南省の高峰)」から流れる「明永氷河」を見るため瀾滄江を渡る予定だった。けれども土砂崩れなのか、通行止めで河は渡れず手前の布村で引き返すことになった。布村には杉の巨木が何本か有り景観区となっていた。通りかかった親子(?)である。

(雲南省徳欽県布村にて 2019年7月 佐々木健之撮影)

「わんりい」2019年9月号の目次は20ページにあります

この言葉、日本では四字成語としては使われていませんね。「粉骨砕身」という言葉に置き換えられるでしょうか。

・>・>・>・>・>・>・

諸葛亮は、劉備を助けて成都に蜀の政権を打ち立て、自ら大臣となりました。しかし、まもなく劉備は病気で亡くなってしまいました。

劉備の死後、諸葛亮は劉備の息子・劉禪が蜀の国を治めるのを助けました。誠心誠意国の経営に当たり、蜀の国を段々に盛り上げていきました。劉備が生前望んでいた中国の統一を実現すべく、中原の支配権を手に入れようと、前後六回も軍隊を率いて戦いました。統一の大業を成し遂げるべく、彼は《後出師表》をしたためました。その中で諸葛亮は、「慎み深く献身的に尽くし、死ぬまでやめません」と決心を述べ、その言葉通り、忠誠心を持って一所懸命蜀の国のために働き、戦場でその一生を終えたのでした。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：鞠躬＝身を屈めて敬い謹む様子。瘁＝疲れ果てる。四字成語としては、あることに全身全霊で当たり、奮闘努力すること。

使い方：王先生は、教育事業に全身全霊で取り組み、一生を捧げられました。

・>・>・>・>・>・>・

諸葛亮、日本では諸葛孔明として有名ですが、中国では諸葛亮と呼ばれています。ご存知のように孔明は字、亮は本名です。

諸葛孔明は、三国志演義の中では才能豊かな英雄の一人として描かれ大活躍しますが、話には大分誇張があるようです。それでも、「三顧の礼」で劉備に迎えられ蜀の宰相となり、劉備の死後はその子・劉禪を助けて蜀のために尽くしたことは史

実です。蜀の国を経営する中で、劉禪に「出師表」を奉り、軍隊を動かしています。

「出師表」とは、臣下が出陣する時に君主に奉る文書のことですが、孔明が劉禪に差し出した「出師表」は古今の名文として名高く、単に「出師表」と言えば、孔明のものを指しているのです。そして孔明は2回にわたって「出師表」を提出したと言われ、区別するために2回目のものは「後出師表」と言われています。この本では、「後出師表」のことを取り上げています。

ところが、この「後出師表」には昔から、学者

の間で真偽の論争があります。それでもここで「後出師表」のことを言っているのは、この後孔明が戦場で亡くなっているからでしょうか。「真偽の議論は、大人になってからやりなさい」という事でしょう。

孔明は、自分を迎えて重

用してくれた劉備の信頼にこたえて、劉備亡き後もその子劉禪に誠心誠意仕えて、鞠躬尽瘁というこの言葉を実践した人で、三国志演義では理想的な人物として描かれています。確かに素晴らしい人物ですが、軍人としては、五回も出陣し北伐を試みましたが、めぼしい成果は上げられませんでした。

これに関して、《三国志（歴史書）》の選者・陳寿は、「孔明は、政治家としては優れていたが、軍人としては一流とは言い難い」と評しています。

しかし一方で、孔明の北伐は、蜀の版図を広げるためではなく、北に位置する魏の進出を阻止するのが目的で、孔明の存命中、その目的は十分に達せられたとの評価があります。

戦線の近くで屯田を実施したことが、その証拠として挙げられています。



Shā shēn yǐ chéng rén
殺身以成仁

身を殺して以て仁を成す〈衛霊公第十五〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥 雄



この章の全文は次のようになっています。「子曰：『志士仁人，無求生以害人，有殺身以成仁』(Zi yuē : 『Zhì shì rén rén, wú qiú shēng yǐ hài rén, yǒu shā shēn yǐ chéng rén.』)」(子曰く「志士仁人は、生を求めて仁を害すること無く、身を殺して以て仁を成すこと有り」。「志士」とは志を持った人のことです。「仁人」とは人間らしい心を持った人のことです。このような人たちは人間らしい心を棄ててまでして生き永らえようとはしない。我が身を殺して人間らしさを全うするものだ、ということです。「士」とはもともと男子を表わす言葉でしたが、現在では「女士 nǚshì」という言葉が示すように、女性に対する敬称の一部としても使われます。

孔子の生きた春秋時代と、それに続く戦国時代では特に、自分の知識と才覚を認めてくれる主君を求めて各地を周遊する「有為」の男子を指していました。普段は固有の財産を持たない遊民のような存在でしたが、自分を採用し高く評価してくれる主君の為なら身命を賭して戦う覚悟を持った人たちのことです。孔子の言う「志士仁人」とはこの類の人たちと思われませんが、ここで気になるのは「身を殺して…」の一節です。

こんな話があります。孔子が生まれる百年ほど前のことです。齊の公子小白は、兄の公子糾と君主の位を争った末、これを破って齊の君主桓公となりました。この時、管仲は公子糾の臣下として桓公と戦いましたが不幸にして敗れ、公子糾は殺されました。糾の臣下として共に戦った召忽は捕われるのを潔しとせず自刃しました。ところが管仲は捕われた末に一度は殺されかけましたが、この時、桓公に仕えていた旧友の鮑叔の進言もあって一命を救われた後、桓公を善政に導き、宰相にまで上りつめた

のです。桓公は管仲の助けを得て諸侯の覇者となり、傾きかけた周王室の権威を守ることに成功しました。

この際、兄殺しの桓公に加担した管仲は果たして功臣なのか、変節者なのか、この行為の是非については、孔子の在世中にも常々議論的になっていたようです。

ある時、弟子の子貢は孔子に次のように問いかけました。「管仲非仁者與？桓公殺公子糾，不能死，又相之！(Guǎn zhòng fēi rén zhě yú? Huán gōng shā gōng zǐ jiū, bù néng sǐ, yòu xiàng zhī!)」(管仲は仁者に非ざるか。桓公公子糾を殺すも、死すること能わず、又た之を相く)〈憲問第十四〉。管仲は主君の公子糾を桓公に殺されたにもかかわらず、自ら死を選ぶことさえできず、兄を殺した桓公の下で宰相にまで成り上がった。仁者とはいえないのではないかと。

これに対して孔子は次のように答えています。「管仲相桓公，霸諸侯，一匡天下。民到于今，受其賜(Guǎn zhòng xiàng huán gōng, bà zhū hóu, yì kuāng tiān xià。Mín dào yú jīn, shòu qí cì)」(管仲桓公を相けて、諸侯に覇たらしめ、天下を一匡す。民今に到るも、其の賜を受く)。桓公は管仲の助力によってはじめて平和裏に天下を正すことができた。百年後の今も民はその平和の恩恵を受けている。もし管仲がいなかったらどうなっていたか……、と言って管仲の行為を強く弁護しています。

孔子はまた子路に対しても、同じような問いに同じような答え方をしています。「身を殺して仁を成す」とは、必ずしも安易に死を美化する言葉ではなかったようです。

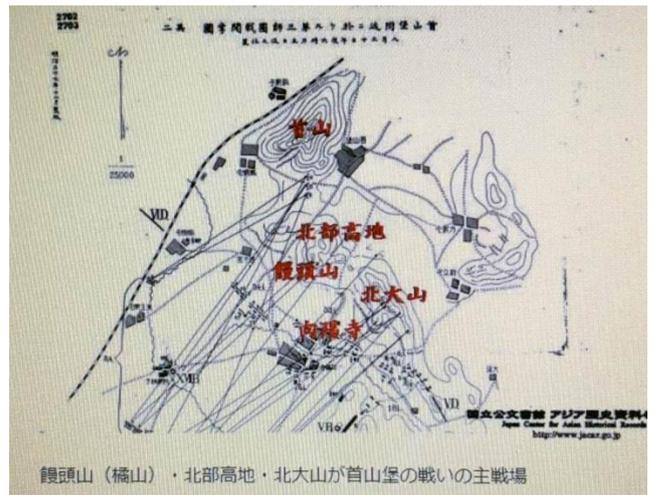
(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

「遼陽」という街 (その1) 寺西俊英

皆さんは、「遼陽市」という都市を聞かれると何を思い浮かべますか？たとえば「遼寧省」「高鉄の駅の一つ」「紅樓夢（曹雪芹）」「白塔」「ヌルハチ(努爾哈赤)」「日露戦争」「広佑寺」「太子河」「東京城」等～このうち3つ以上思い浮かぶ方はかなりの中国通だと思います。かく言う私もこの街は2007年の大連赴任まで知りませんでした。では、遼陽市は遼寧省の一都市ですが、大きさの順で行けば何番目くらいの都市でしょうか？省都は、瀋陽で人口も街の規模も一番大きな都市です。車のナンバーはアルファベットの最初の文字のAです。「遼 A〇〇〇〇」（遼は遼寧省のこと）といった具合です。大連市はどうでしょう。瀋陽の次に大きく、Bとなっています。では遼陽市は遼寧省では何番目の都市でしょう？意外なことにKなのです。そう、11番目の都市なのです。ちなみに人口は2018年で約180万人です。これでKですが、日本では中規模の政令指定都市に相当しますね。

遼陽市は瀋陽と大連の間に位置し、大連とハルピンを結ぶ高速鉄道の停車駅にもなっています。現在はさほど目立たない街となっていますが、歴史を遡ると大連や瀋陽より歴史は長く偉人も多数輩出しており、ベスト5に入ってもおかしくない是非皆さんに知って頂きたい都市です。これから数回に亘って「遼陽市」にスポットライトをあて連載して行きたいと思います。

今でこそ大連市は日本人の知るところとなり、観光客が大勢行くところとなりました。しかし100数十年前は名も無き農漁村で殆ど歴史に登場することはありませんでした。ご承知の通り1904～05年に日露戦争が勃発しました。遼東半島が注目を浴びたのはその10年前に起こった日清戦争で日本が勝利した際に、ロシア、フランス、ドイツによる三国干渉で折角手に入れた遼東半島を放棄せざるを得ず、中国に返還した時からと言えます。ロ



遼陽の会戦の主戦場・首山堡

(国立公文書館・アジア歴史資料センターより)

シアは放棄させた代償として東清鉄道の敷設権を獲得し、さらに旅順・大連を租借地としました。そして日露戦争へと繋がっていくわけですが日露戦争と言えば、多くの日本人は「旅順」「203高地」「水師営」等が思い浮かぶでしょうが、私はもう一つ「遼陽の会戦」をあげたいと思います。

遼陽の会戦は、司馬遼太郎の「坂の上の雲」に詳しく書かれていますが、概要をここに簡記すると以下の通りであります。——「遼陽」の項の書き出しは、〈遼陽は南満州にあっては、奉天（瀋陽）に次ぐ大都会である〉と書かれています。つまり当時は大きな街だったのです。ロシア軍は、〈遼陽はその北の奉天以上に戦略価値がある〉と見ていたと書かれています。つまり四方八方から道路がこの地に集中しており、南満州の中核として位置付けたのでしょう。もともとこの街は四角形で、周囲は城壁が巡り八つの城門を構え、14世紀末頃には大改築されていました。ロシア軍は勝手に租借地のように取り扱い、場外の西郊に遼陽駅を作り、周辺に近代設備を集中し5年かけてロシア人街を形成したのです。総司令官のクロパトキンはこの地に大軍を終結して日本軍を一気に殲滅する作戦を作り上げました。同会戦は1904年8月24

日～9月4日の12日間の戦闘で、両軍の主力が初めて激突した戦いです。クロパトキン率いるロシア軍は23万人の兵で防御網を構築しました。それに対し大山巖率いる日本軍は14万人で対峙したのです。12日間の中で一番の激戦は、遼陽駅の南西に当たる「首山堡」をめぐる攻防でした。首山は200m余りの山ですがそれから北大山に連なる丘陵地が主戦場となりました。日本の騎兵の生みの親ともいわれる秋山好古が縦横無尽に活躍したのはこの戦いです。ロシア軍は日本軍をはるかに凌駕する兵器や物資を持ち堅固な防御陣地を構築しながらも敗色濃くなり、奉天に退却して行っただけです。この時日本軍は追撃するチャンスでしたが余力は残っていませんでした。この戦いの死者は両軍で4万人を上回ると言われています。有名な203高地の攻防はこの戦いの後となります。遼陽出身の友人に聞きますと、「今から115年前に行われた〈遼陽の会戦〉を知っている地元の方は残念ながら殆どいないようです。激戦地の一角の「首山」は何度も友人と山登りをしたことがありますが、戦争の傷跡など見かけません」とのことでした。中国のこの地方の皆さんからしますと、自分たちの領土に勝手に進出してきた国同士が戦争したのですから迷惑千万な話ですね。

さて遼陽はいつ頃から歴史に名を残し始めたのでしょうか。実はこの中国東北部は古代からいろいろな民族の興亡が目まぐるしくあったところです。ここで歴史を遡ってみましょう。遼陽は、かつては「襄平」と称し遼東地方の中心地で、歴史を調べると戦国時代（BC475年～BC221年）まで遡ることができます。つまり今から約2400年前の記録が残っているのです。あの孔子が生きていた時代です。戦国時代には、燕（BC11世紀頃～BC222年）という国の遼東郡の中心地でした。燕は、春秋戦国時代の春秋十二列国の一つで、戦国七雄の一つとされていました。首都は薊に置かれていました。今の北京です。ご承知の通り、この燕はやはり戦国の七雄の一つであった秦により滅ぼされ、

秦は初めて中国を統一しました。その秦も漢に滅ぼされます。漢代（BC206年～AD220年）には玄菟郡に属しました。404年に高句麗が襄平を占領し遼東府と改名。さらに唐（618年～907年）が高句麗を滅ぼしてこの地方を治める唐の安東都護府は、その所在地を平壤から襄平に移しています。ついで遼（契丹人の征服王朝＝916年～1125年）の時代に襄平から遼陽に改名され、遼の副都「東京遼陽府」となりました。その後女真族の金（1115年～1234年）に滅ぼされましたが、金の第5代皇帝の世宗は、次号で紹介する遼陽の象徴である「白塔」を建立しています。その後、元（蒙古族）、明（漢族）、清（女真族、後金）の各時代とも遼陽はこの地方の中心都市としてあり続けたのです。後金（後の清）の最初の皇帝であるヌルハチが初めて遼陽を都としました。ただその期間はわずか3年で、奉天に都を移しました。遼陽の城壁が長いため守りにくいのが原因のようです。世が世であれば遼陽は遼寧省の省都として君臨していたかもしれませぬ。

本号の最後に、遼陽市の地理的な状況に触れておきます。面積は4744平方キロもあり、山梨県の面積（4465平方キロ）とほぼ同じです。地形は平野45%、丘陵20%、山地35%となっています。市の東南部は山々が続き、「湯河風景区」などの観光地がいくつもあります。その地域を除くと、平野や丘陵が広がり大きな山はありません。街の中を多少折れ曲がりながらも東西に「太子河」という河川がゆったり流れています。とても数十年前には何度も洪水があった川のように見えません。南は「鞍山市」という街に隣接しています。昔から鉄が取れることで知られ、近代に到って製鉄の街として有名になり「鋼都」と呼ばれています。遼陽はそこへの人や物資の供給基地の役目を果たすようになったようです。ちなみに鞍山市のナンバープレートは、大連に次ぐ「C」となっています。（つづく）

今回は神々ではなく、番外編としてチベット仏教(中国語で西藏仏教)の歴史に実在した教祖の一人を描いた壁画をご紹介します。

女王谷では元来ヤクを放牧する標高 4000m 位のアムド系チベット族(中国語で安多藏族)が住む場所にチベット仏教ニンマ派(中国語で西藏仏教寧瑪派または紅教)のお寺が見られます^{註)}が、例外的に丹巴の町の近くの標高 2300m 位の山腹に在る中路集落に今回ご紹介するチベット仏教ニンマ派のお寺が有り、旧金堂に大規模な壁画が残っています。お寺の歴史は古く、現在の中路集落に住む人達の祖先が 1000 年位前に移民して来た時にチベット仏教ニンマ派を持ち込んだようです。移民して来た当時は羊を追う放牧の民だったと伝承されていますが、現在この標高ではギャロン・チベット族(中国語で嘉絨藏族)として畑作中心の農業を生業にしています。ギャロン・チベット族の一口では語れない複雑な移民の歴史の一端を表しています。

話を壁画に戻しますが、調査したフランスの研究者 Nils Martin 博士によると、ヒマラヤ北部等に残っている物と同じネパール派画(中国語で尼泊爾派画)と呼ばれる四角い顔立ちが特徴の 500 年位前に描かれた仏教壁画だそうです。私が壁画を見て気になったのは、異性の脇侍が数多く配されているだけでなく、ニンマ派教祖の公にされているだけでも 3 人いた妻達も菩薩のような脇侍として描かれている事で、ニンマ派の「墮落」が原因になって 16 世紀末にツォンカバ(中国語で宗喀巴)がチベット仏教ゲルク派(中国語で西藏仏教格魯派または黄教)を興したとされている事に成るほどと領きました。ただこれはニンマ派がタントラ仏教に影響されていたのに加え、古代ペルシャ B.C.10 世紀頃に起源を持つ拝火教の流れを組むボン教とも融合したため、後世価値観が変化して「墮落」した様に見られたとも解釈できます。

これら壁画の幾つかを以下にご紹介します。なお全体として保存状態が悪い壁画の中から比較的状态が良い部分を選んでいきますので、選択が偏っているように感じられるかも知れない点をご容赦下さい。

■注：女王谷では近年、アムド系チベット族を標高の高い所から低い所へ移住させる政策のため、政府援助で移住地近くに新しいチベット仏教ニンマ派の綺麗なお寺が建てられています。



写真1：教祖とされるパドマサンババ“Padmasambhava”(中国語で蓮華生)或いはグルリンポチェ“Guru Rinpoche”(左)と不詳な脇侍(中)と菩薩の脇侍として描かれた第一の妻“Yeshe Tsogyal”(右、中国語で益西措嘉)

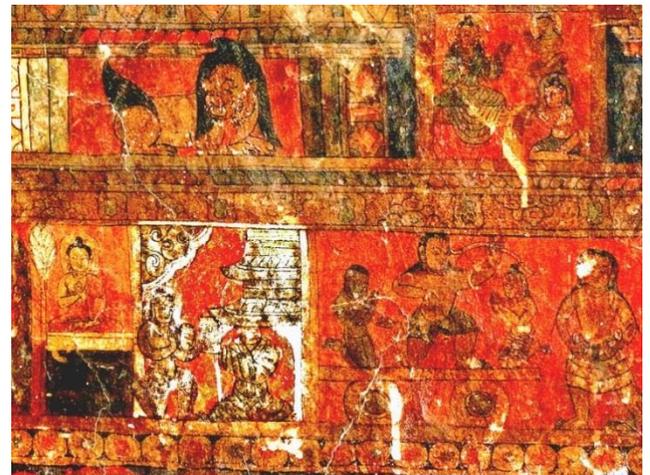


写真2：信仰心に溢れた世人の暮らしを描いた部分画



写真3：壁画が残る旧金堂の外観(新しい金堂は近くに建てられています)

杜甫「曲江二首」

報告：花岡風子

「古稀」という言葉が「人生七十古来稀なり」という言葉から来ているということをご存知の方は少なからずいらっしゃるはずですが、しかし、この出典が杜甫の『曲江』という詩だということはあまり知られていないようですね。私も今月のお題で初めて知りました。

今回もいつものように、作者の人生とその時代背景から植田先生の講座が始まりました。「杜甫の詩は、当時の歴史的背景を知ってから読むと、また感慨が深まりますね。そこが李白とは違うところですね」と植田先生。

杜甫が生きたのはまさに動乱の時代。歴史に翻弄されながら、人間関係の複雑な渦に巻きこまれ、その時々で様々な想いを詠んでいるのですが、その背景に何があり、杜甫その人の身に何が起こっていたかを知ると、原詩の一字一句が作者の想いと重なり、作品自体がリアリティをもって迫ってきます。

この詩は「安祿山の乱」後の荒れ果てた都の様子を嘆いた、かの有名な『春望』を書いた翌年、758年の作品だそうです。杜甫は元々、玄宗皇帝のもとで理想の国づくりをしたいという野望を持っていましたが、玄宗に接近する手立てもなく、極貧の生活を送っていました。その最中に安祿山の乱がおこり、玄宗皇帝は蜀に避難します。それを受けて太子李亨（りこう しゅくそう 肅宗）が帝となると、いち早くその即位の地、れいぶ 靈武へ駆けつけようとしています。しかし途中で捕らえられて都へ連れ戻されました。長安の荒廃ぶりを目の当

たりにした杜甫は「国破れて山河あり…」と詠んだのでした。そしてそのひと月後、再び懸命の脱出を試み、新たに肅宗の行在所となった鳳翔ほうしょうの地に駆けつけるのです。そんな健気な杜甫の行動に感激した肅宗は杜甫に左拾遺さしゅういという役職を与えます。これは、のちに白居易が若きエリートのところ務めた役職です。地位は低いものの、皇帝に誤りがあれば直言して諫めるという役割です。杜甫のようなノンキャリアとしては、最高の位といえます。ところが長安に復帰した後、安祿山の乱で敗戦の罪を着せられた房琯ぼうかんを弁護したために、肅宗の怒りをかってしまうのです。「言ってもいいぞ、と言われて、本当に言うと嫌われる。そういう理不尽なことは今の世の中でもあるようですね。」と植田先生。

この背景には親子の骨肉の争いと、派閥間の利害が絡んでいたのです。房琯は玄宗皇帝の派閥に属する学者肌の人間でした。彼は乱発生当時、宰相の地位にありました。そして自ら軍を指揮して惨敗を喫しています。玄宗皇帝は安祿山の乱で、しぶしぶ退位はしたものの、息子に帝位を奪われたことを面白く思っていないのでした。ですから、息子の代になったとはいえ、宮廷内では、玄宗派と肅宗派の二つの派閥が水面下で互いに綱引きしていた、という複雑な事情があったようです。杜甫が房琯と親しく、また父玄宗に心酔していたことを肅宗は知っていましたから、彼の直言がイチイチ面白くありません。杜甫にしても、いくら進言しても聞き入

れてもらえないので、次第に仕事に対する熱意を失っていきます。また、肅宗は玄宗皇帝のように詩文や芸能を愛した文化人タイプでなく、職能を重んじる現実主義者でもありました。良く言えば、父がダメにした国を何とか立て直そうとしていた真面目人間だったのかもしれませんが。

一方、杜甫は杜甫で、厚い忠誠心から懸命に肅宗に仕えたものの、凶らずも派閥抗争に巻き込まれ、やる事なすことうまくいかない。『曲江』はそんな最中に書かれた詩だったのです。

さて作品はといえば、前半と後半でガラリと詩風の変わる新鮮な構成をとった七言律詩です。この詩形は杜甫が最も得意としたジャンルでもあります。

第一句、季節は晩春、「朝廷から帰ると、使い古した春の衣装を毎日質に入れる」という、一瞬ドキッとさせるような、結構インパクトのある出だしです。二句目は、「毎日、酔い潰れて帰る。」三句目は「酒場の借金は当たり前のように、行く先々で増えていく」というそして、四句目に「この人生、七十まで長生きすることは滅多にないのだから、今のうちにせいぜい楽しんでおきたいのだ」という意味あいを込めた名セリフ「人生七十古来稀なり」が来るのです。そして、この句を境に、詩風はガラリと変わり、素晴らしい自然描写が連なります。

五句目、「蜜を求めるアゲハチョウの群れが、花むらの奥の方に見え隠れする」、六句目は「水面に軽く尾をチョンチョンとつけながら、トンボたちがさも楽し気にスイスイと飛びまわっている」。

そして七、八句目にはまた屈折があって、作者が自然を相手に話しかける形になっています。「私はこの自然界に対して我が意を伝えたい。そなたも私も時とともに流れていくのだから、しばしの間でも共に仲良く、互いの心にそむくことのないようにしようではないか……」と。

前半は、ストレスをかかえて、毎日ヤケ酒。呑んでくれて、あちこちで借金を繰り返すダメ親父の姿が目浮かびます。「杜甫はね、14歳で酒を飲んでいたので、今だとアウトですよ。洛陽の名士たちと酒を飲んで詩を作っていたわけですから……。まさに天才少年ですよ。ま、青少年諸君はマネしちゃいけませんけど。」と植田先生。そんな頃から飲んでいたのですから、強いことは間違いないでしょうけど、あちこちで借金するほどの呑べえだったんですね。中国語で酒量の大きいことを「海量」と言いますが、杜甫に関してはこの表現も大袈裟ではなかったかもしれないな、と思っていると植田先生が「完全にアル中、少なくとも依存症だったと思いますよ」と仰ったので、なるほど、と納得しました。

役人としての地位は低く、給料も安かったので、衣裳を質入れしても酒代は到底払えなかったのでしょうか。肅宗の下で、相当なストレスを抱えていたものの、この時期、王維などの友人達と交流も出来たので、杜甫の人生のなかでは、どちらかといえば幸せな時期だったかもしれません。

qū jiāng èr shǒu qí èr
 曲 江 二 首 其 二
 dù fǔ
 杜 甫

cháo huí rì rì diǎn chūn yī
 朝 回 日 日 典 春 衣
 měi rì jiāng tóu jìn zuì guī
 每 日 江 头 尽 醉 归
 jiǔ zhài xún cháng xíng chù yǒu
 酒 债 寻 常 行 处 有
 rén shēng qī shí gǔ lái xī
 人 生 七 十 古 来 稀
 chuān huā jiá dié shēn shēn jiàn
 穿 花 蛺 蝶 深 深 见
 diǎn shuǐ qīng tíng kuǎn kuǎn fēi
 点 水 蜻 蜓 款 款 飞
 chuán yǔ fēng guāng gòng liú zhuǎn
 传 语 风 光 共 流 转
 zàn shí xiāng shǎng mò xiāng wéi
 暂 时 相 赏 莫 相 违

ちょう かえ しゅん い てん
 朝より回りて日日春衣を典す

こうとう
 毎日江頭酔いを尽くして帰る

しゅさい じんじょう
 酒債は尋常行く処に有り

こらいまれ
 人生七十古来稀なり

きょうちようしんしん
 花を穿つ蛺蝶深深として見え

てん せいてい かんかん
 水に点ずる蜻蜓款款として飛ぶ

でんご とも るてん
 伝語す風光共に流転するに

あいしろう たが なか
 暫時相賞して相違うこと莫れ

今回は一首だけ、ということもあり、何度も読みの練習を繰り返しました。漢字の読みは基本的に一字一音ですが、多音字もあり、読みと意味が違うものもあります。一句目の「朝」は、zhāo と読むと、「朝」、cháo と読むと、「朝廷」とか「王朝」、また動詞で cháo と読めば「対面する」、「向かう」という意味になります。「これ、

最初読んだとき、朝帰りの詩かと思ったんですよ。でも、朝だとそんな早くに質屋はあいていないし…」と植田先生がおっしゃったので一同大笑い。こんなお話しを聞くと次回から読み間違えることはなさそうです。当時の歴史的背景や、宮廷ドラマを思い描いた後の音読では、作者の気持ちになりきったつもりで鑑賞ができるのが、この講座の醍醐味です。やけっぱちの後には、人間世界の悲喜交々をしり目に淡々と、移りゆく自然界に目を向ける杜甫。そしてそこに時空を超えた新境地が広がります。人間関係に疲れ果て、自然界に心の救いを求めるその姿は、なんだか現代でもありそうなことですよ。

杜甫は左遷された後、ついに官を棄て、各地を転々と流浪した挙句、古希には程遠い、満58歳で人生を終えました。「私もね、若い頃は七十歳というとなんでもないお爺さんに思えましたけどね、自分がそうってみるとあつという間で、古希もとつくに過ぎてしまいました」と植田先生。アラフォー女子もあと、2年で五十の大台に乗ります。年々、時間が加速しているのではないかと思うほど、飛ぶように日々が過ぎていく今日この頃。もし幸いにして古希を迎えることが出来たなら、やはりあつという間に終わってしまったと感じることだろう、とすんなり思えるところに、40代後半を感じるのでした。



杜甫。清宮殿蔵本
 (Wikipedia より)

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑤）

高島敬明

1979年7月にナイジェリアに到着して7日目に現場で人身事故が発生したため翌8日目によりやく取れた15時発の飛行機でカドナに向かい、紆余曲折を経て何とかカドナの事務所に9日目の朝に到着したところから今号はスタートします。

安全管理室において事故の詳細な説明がなされました。127tクレーンは100m近くまでブームを伸ばし、エンジンと直結したドラムに巻かれた吊りワイヤーで4人乗りのゴンドラを吊って28mの高さで作業中でした。ところがクレーン運転手の不注意からドラムがニュートラルに入りブレーキが利かない状態で19mまで9m落下したのです。すぐ運転手が気づき緊急ブレーキを踏みましたがそのはずみで1名が外に投げ出され20m近く落下して即死とのことでした。その作業員は5日後には日本に向け室蘭まで帰る予定でした。S日鉄の関係会社の人です。そこまでお聞きし申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。すると関係者の方が、「高島さん、ご遺体にお参りいただけますか？ それから日本大使館の立会いの下、棺を封印しますから」と言われたので、大会議室の隅に置かれた棺に向かいました。日本航空のマークの入った棺が置かれていました。何でもJALの飛行機には何個か棺が常時積み込まれているようで、必要であれば海外の大きな工事現場に貸し出すそうです。お参りして中を見ますと真っ白な顔をしたご遺体が液体の中に浮かんでいました。「申し訳ありませんでした」と自然に声が出ました。「封印しますのでお立会いください」との声がかかりました。私が到着して確認するのを待っていたかのように。布ロープで何か所か結ばれ真ん中の紐の結び目に熱せられた蠟を流し、熱くなった焼きごてで封印していきます。その作業が終わると、どこへともなく運び出されて行きました。

14時か15時頃だったと思います。案内された大食堂で丸一日以上経っての食事を摂りました。食後、日本への報告のためサイト（カドナの現場）の日本人医師を訪ね、所見をお聞きしてから事務所に戻り



ぬかるみの中の現場

ました。そのころになると仕事の終わった当社の作業員が少しずつ私の周りに集まって来ました。作業員から事故の様子だとかイタリアの食堂業者が作る食事のまずさなどめいめいが私に文句を次々にぶつけて来ます。再度改めて50人くらいの作業員、下請けの作業員から一番不満の食事の話、事故の話聞き、当事者の運転手ともじっくり話をしました。彼は事故の当事者ですから現地の裁判でもあれば長い間この国に留まり刑事罰を受けますから必死に今までと同じ弁明を繰り返します。

23時くらいになりやっと今日の宿泊するコンテナハウスに引き上げて来ました。40時間くらい一睡もしないで睡魔を持ちこたえてやっとシャワーを浴びるまでになりました。さっぱりした下着に変えて片付けていたとき、茶色い点々が一面に付いているパンツを見つけました。心配になり翌日日本人医師の所に行きました。すると医師は、「多分極度の緊張が続いたせいで血尿が出たのでしょうか」とのことでした。日本を出発して以来10日間、ショッキングな死亡事故と環境の変化により緊張と不安でいっぱいになってしまったのです。

ベッドに横になると緊張がほぐれ、どっと疲れが出てすぐ寝込んでしまいました。朝5時頃でしょうか。何か外で呼ぶ声がしてコンコンとドアをたたいています。空耳だろうとまた横になりました。すると確かに涙声のような、押し殺したような声で誰か

叫んでいます。耳を傾けると、「係長、係長、帰してくれ、帰してくれ」と叫んでいます。聞きなれた今回一緒に来た大班長の T さんの声でした。この前まで当社の下請け会社から T さんの弟さんが派遣され、1 年間立派に務めあげて帰国したばかりでした。ドアを開けると倒れこむように入って来ました。もう一人 T 班長の腕を抱えた若い男も入って来ました。班長が心配になり付いてきたとのことでした。二人の話では、T 班長は現地に入って以来、食事が合わず段々と言葉も少なくなって痩せて行ったこと。技量は飛び抜けており皆が信頼していた大班長だけにそれとなく励ましていたが落ち込む一方であったこと。そして極限になったのがゴンドラからの転落事故を目の前で見たこと、のようです。

事故は聞いていた話よりかなり違っていました。事故発生の直後、班長は真っ先に駆け寄り何人かで抱き上げたようです。落下地点には基礎の鉄筋が上向きに何本も出ていて、その鉄筋に突き刺さったような状況だったようです。急遽鉄筋を切断し即死の死体を収容したのですが、その陣頭指揮をしたのが T 班長だったのです。T 班長は、「係長、俺を日本に帰してくれ。日本ではどんなことでもするが、ここはだめだ。俺には合わない。かえしてくれ！」と涙声で訴えるのです。私は、「何を言っているのだ。弟さんも 1 年間立派に務めあげたではないか。兄貴のお前ができないことはない」と父親ほどの大男に真剣に説得の言葉をかけますが、説得力がありません。しばらくの押し問答と沈黙の後、若い下請けの作業員が、「班長、俺らを置いて行かないでくれ！ みんな同じ気持ちだ。班長がいないと困るんだ」と泣きながら話しました。「うん、うん」とうなずいていた班長は、しばらくして突然立ち上がって二人で朝もやの中を帰って行きました。遅くなってベッドから起き上がった私は、現場での朝礼と準備体操の真っただ中に入って行きました。班長、若者とも何もなかったように整列して、元請け会社からの指示を受け現場に向かって行きました。

このことがあって、これはすぐにはラゴスに帰ることはできない、もう少し滞在する必要があるなど判断しました。サイトの 2 日目は慌ただしく始まりましたが、私には大きな仕事が残っています。事故報告書を東京の本社に発信しなければなりません。

当然当事者間の補償、事故責任と損害賠償がこれからの大きな問題になってきます。当時はラゴスとも短波の電話で話している状況で、簡単に日本との連絡はできません。紙のテープに丸い穴を開け、それを読み取っての通信手段になります。郵便局では電信欄にローマ字で箇条書きに極力簡単にまとめましたが、ローマ字の文章ですから書くにも読むにも時間がかかります。結局次のような文章をローマ字で送りました。

①当社の運転手の経験不足が大きな原因の事故であること、②ご遺体は成田から函館に向け再度送られるが、成田には役員クラスがお迎えして欲しいこと、③現地での警察の判断が今後の状況を決定づけること、などでした。

日本への事故報告も済み、警察の処分を待つだけになりましたが当然早急には結果は発表されません、とのことでした。噂は飛び交いますが、決定的なものはありません。当社のクレーン運転手は事故の当事者として神妙に警察の処分を待っていました。日本では、起訴するのかどうかは 1 か月くらいかかります。そんな待機中、思いもよらず突然に事故に対する見解が発表されました。事故から 5 日目、私が現地に来て 4 日目です。元請けの安全担当者が至急とのことで警察に呼ばれました。警察では事故に対する考え方、見方を説明され比較的早い時間で帰ってきました。すぐに私も含め関係会社の方々が安全管理室に呼ばれ説明を受けました。が簡単なものでした。ナイジェリアの警察の見方、判断は次のようなものでした。「ゴンドラには 4 人乗っていて一人が転落したというのは、本人の不注意から起きた事故である」とのことでした。少なくともナイジェリアでは、理不尽でも死亡した本人の責任として決着したわけです。運転手の未熟な操作、安全ベルトの不使用などいくつかの問題点は不問になってしまいました。現場の工事も何もなかったかのように、又事故現場のプラントでも工事は再開されました。また郵便局から本社に向け事故は当社に起因するものではないとの警察の判断であったことを打電しました。この国では交通事故でも犯人を捕まえられない警察ですからこうした判断で済んだのでしょう。PM 他関係者全員胸をなでおろしたことと思います。

(続く)

▼プロローグ

ことの起こりは2018年5月に、滋賀県にある赤坂山に1泊2日の山旅をしたことだった。メンバーは3人で、ともに小学校時代からの友人である。無事に山旅を終えた後、そのひとり浪花芳法くんが、「来年の春に台湾の最高峰の玉山に行かないか。台湾に知り合いがいて、情報が入るので、自分たちでツアーを組めば安上がりにもなる」との提案をした。そのときは「いいね、いいね」と返事していただけだったが、その年の秋になって「玉山の話、具体的にメンバーを組みたいんだが…」との打診があり、こちらもだんだんその気になってきた。浪花芳法くんは神奈川県厚木市在住。「こちらでもメンバーを探すので大阪でもさがしてほしい」とのこと。5人～6人を想定しているようだった。

2019年に入って、台湾の知人から連絡がきたと、玉山に関わる情報がこちらにも届いた。中国語で書かれた資料だったので詳細は分からないが、並んだ漢字からは部分的に理解できることもあった。

玉山に登るためには、事前に台湾当局に入山申請をして認可が下りなければ登れない。それも1日の入山数が決められているという。(後で調べると申請は120日前から、1日の入山者は92人、うち外国人枠が24人)。

その後、渡航手続きや、飛行機の予約、現地ガイドとの連絡、日程調整など、浪花芳法くんの孤軍奮闘が始まった。彼が中国語を少し学んでいたこともあって、すべて彼にお任せの状態だった。こうして、3月ぐらいから、具体的な登山計画や台湾観光についてもメールでの情報や確認事項が頻繁に入ってきた。確定したメンバーは4人、浪花くんの山仲間の高橋キクエさんと、僕の山仲間の岩本明子さんだ。年齢はみんな60代というシルバー登山隊だ。ツアーの日程は4月22日から4月28日までの6泊7日と決まった。

▼羽田空港に4人が集結

出発日の4月22日は羽田空港を早朝の5時55分発のピーチアビエーション航空MM859便だ。格安航

空券利用のためにこの時間になった。僕と岩本さんはこの飛行機に間に合わせるために、前夜の20時26分の新大阪発の新幹線に乗った。品川から京浜急行に乗り換えて羽田空港国際ターミナル駅に着いたのは夜中の23時20分。改札を出ると、浪花君が待っていてくれた。「いやあ、ごくろうさん」と言いながら「上の階のベンチでみんな仮眠しているよ」と空港ビル内を案内してくれた。羽田空港の国際線ターミナルに入り、チェックインカウンターからエスカレーターで上に上がると、すでに閉まっている店舗の店先や休憩所のベンチ、ソファに早朝の便を待つ人たちがたくさん寝転がっていた。ここで4人組の一人、高橋キクエさんと合流。お互いを紹介し合った。これで4人がそろい踏みだ。

適当なベンチを見つけて仮眠に入る。時間は深夜12時を回った。幸いにして僕はどこでも寝ることができるタイプなので、いつもどおり、すぐに眠りに落ちた。

▼台湾の地を踏む

日付が代わって4月22日、午前4時に仮眠から起きた。飛行機は5時55分のフライトだ。格安航空便のため、出発が早い。運賃が安いから仕方がない。夜明けの東京の空はどんよりと曇っている。機内の座席はそれほど狭くない。機内では食事や飲み物サービスはない。欲しければ全て有料だ。低運賃だから仕方がないが、これもまたシンプルでいい。

9時30分に台湾桃園国際空港に着いた。約4時間だが、時差が1時間なので実際は3時間で着いたことになる。入国手続き、両替で手間取った。

空港から台南へ行くMRT桃園空港駅乗り場がわからず、ウロウロしたが、何とか高鉄桃園駅(台湾新幹線)までたどり着いた。台湾新幹線は日本が売り込んだので見覚えのある車内だった。2時間弱で高鉄台南駅。イエローキャブのタクシーでとりあえず康橋ホテルに向かった。煩雑なビル街にある康橋ホテル。フロントの女性は少し日本語ができた。こちらの浪花君は少し中国語ができる。ふたりが日本語と中国語が入り交ざった会話をする。荷物を預け

て町なかの散策に出かける。

台南の町なかを歩いていて気が付いたのは、建物の道路側がみんなアーケードになっていることだ。しかしアーケードの下の歩道は平坦ではなく、それぞれの建物によって段差がひどい。一体どうなっている？（帰国してから分ったのは、台湾ではスコールのような突然の雨が多いので、傘がなくても主要な町なかを歩けるようにアーケードになっているということだった）。

その段差のある歩道を、上下運動をしながら町なか散策を楽しむ。すぐ近くに点在している北極殿、孔子廟、鄭成功記念碑、林百貨店と回った。おもしろいのは林百貨店。戦前の日本統治下で、日本人の実業家が建てた百貨店だが、店内をリニューアルして雑貨や観光みやげの店舗になって再登場。装飾やエレベーターなどにレトロ感もあり、人気だという。最上階には飲食店もあり、屋上には当時の神社も残っていた。当時は台湾でもっともモダンな建物だったようだ。

この日の夜は孫さんという我々と同年代の女性と合流し、台南では著名な高級ホテル「シャングリラ台南」の最上階の中国レストランで食事をした。孫さんは浪花君の会社員時代の取引先で、今回のツアーも彼女の世話になった。高級台湾料理を堪能しながら、台南の夜景に眼をみはった。食事は孫さんのおごり（5人で約6000元…2万円ぐらいか）。良家の子女という雰囲気の子孫さんは日本語も堪能だった。康橋ホテルに戻ると、夜の9時までホテルの夜食サービスがあるというので、十分満腹のはずにもかかわらず、アイスクリーム、ショートケーキ、コーヒーにありつく。その夜は快適な部屋でぐっすり寝た。

▼台南の町を探索

4月23日の朝、浪花君と一緒に6時に起床。ホテルの周辺を散歩。さすがにまだ人通りは少ない。近くには寺院や廟がたくさんある。地元の高齢者が店先のベンチや椅子に座っている。ホテルの周辺を一回りして戻り、朝食タイム。

この日の予定は昼過ぎに玉山登山のガイドの小綿羊さんと合流して、登山口に向かう段取りだ。午前中が自由時間になったので、昨日に続いて市内観光に出かけた。台南に来ればまずは市内随一



台南、林百貨店（筆者撮影）



台南、赤崁楼（筆者撮影）

の名所・「赤崁楼」（せきかんろう）へ。もともと赤崁楼はオランダ人によって築城された旧跡である。1653年にオランダ人と漢人の衝突の後、築城された。その後、鄭成功が台湾を占拠すると、東都承天府と改められ、台湾全島の最高行政機関となった。現在は国定古跡に指定されている。

三層の檣（やぐら）のような建築物がふたつ。日本でいえば城郭か。庭園もあるがこの日はあいにく改修中だった。神農街ものぞいた。神農は医療と薬業、農耕の神だ。その通り薬の店がいっぱいだ。休憩はガイドブックに紹介されていない、穴場のレトロ調のおしゃれな「花楼」でコーヒーラテ（80元）。永楽市場は大阪の鶴橋の商店街のような何でもありの市場だ。昨日に続いて林百貨店に寄って5階のパララーで人気の「タピオカ黒豆茶」を飲む（60元）。昼食はガイドブックに掲載されている「度小月」で担仔麵（たんつーめん）（60元）。これはそれほどクセがないさっぱり味のスープ麵だった。

（続く）

3度目のソウル近郊ハイキング (下)

2019.5.28~31 関根茂子

■5月30日(木)晴

今日は、私たちだけでのんびりハイキングだ。6:30ロビー集合。市庁駅地下鉄構内でキンパブ2本を購入(@2,500₩×2)。1号線を清涼里駅7:15~35で京義中央線に乗り換える。表示に導かれるままにたどりついた京義中央線ホームで電車を待っていると、今度入線の電車の行き先が違っている。次発が私たちの乗るべき電車ヤンウォンで浅川巧墓参ハイキングの下山駅、養源を通り越し新しく立派な駅の雲吉山駅へ着いたのは8時過ぎだ。郊外へ向かう地下鉄電車はどの線も結構、込んでいてなかなか座れなかった。ソウル市は人口増で郊外に発展中ということだろう。

待合室でキンパブの朝食後、8:40出発。事前に雲吉山のハイキング記録をネットで調べた通り西へ戻る形で進み、ハングルの道標を確かめ左折、ここにお馴染みの泥落としの空気噴射機が設置8:47されていた。ガードをくぐって小さな川沿いに山の方へ集落の道を道標のハングル「운길산(雲吉山)」目当てに進むと、角に「山頂2.8km」の道標9:04を見る。

左折してナワシロイチゴ、バイカウツギ、チョウセンニワフジなどの花を数えて上っていく。「駅まで1.2km」スジョンサ「雲吉山2.5km」「水鍾寺1.7km」の道標9:11を過ぎ、さらに車道を上るうちに9:17左手の谷側に土道が分かれている。持参の韓国200山の地図では谷筋に登山道の赤線が入っているので、車道の登りはイヤとこの土の道に入り、左手の谷へ下がらないように巻き続きの道を登っていく。

途中で山火事注意の横断幕?を目にし、ルートに間違いないとホッとす。小尾根に登り着き小休止(9:30~37)。尾根道を行くと後ろから年配の韓国人男性が追いついてきて話しかけられる。「お寺に行く」という私たちを待っては、先にたって道案内する格好で登ってくれた。途中休憩1回で急登をがんばり10:23お寺への分岐(道標はない)に登り着いた。

ここからなだらかな巻き道を10分足らずで林道に出た。左に下ると「寺1km」の道標があり、不二門に導かれる。参拝者に交じって石畳の参詣階段を登っているうちに男性の姿は見えなくなってしまった。

上り着いた10:42お寺の本堂前の展望テラスからは、ゆったり流れる漢江ハンガンが見下ろせた。さて、「登山道の続きは?」と見回すと、境内の左手に階段があり上にお堂が建っている。「これかな?」念のため登山者風の男性に聞いてみれば違った。登ってきた階段道をいっしょに下りて彼が教えてくれたのは、不二門の先にあった左の林へ延びる階段だ。「雲吉山0.8km 駅2.8km」道標10:51から階段を登りだす。こわれた膝には階段は大変なので、すぐ左手に現れた土の小道に入ったが、これが段差も大きく足場も悪く、這いつくばったり杖にすがったり苦勞して登ると左から階段道が合流。

ひと休み(11:12~26)して、正規ルートのおよくなった道に行く。駅への下山口道標を過ぎると行き止まり。高みの休憩台に休んでいる人たちに「山頂はどっち」と聞くと、休憩台手前を右に下りると案内してくれる。



チョウセンニワフジ



靴の泥落とし空気噴射機設置所



水鍾寺からの漢江の眺め

分岐を見落とししたのだ。下りた所がヘリポート 11:34 になっていた。

岩のごろごろした斜面を右に見ながら巻き登山道をたどり、やっと山頂(11:45~12:35)に着く。登山地図には寺から40分のところ1時間かかった。展望台テラスもある。山名石標と谷向こうのイエボンサン禮峰山をスケッチに収め、昼のパンを食べて大休止していると、縦走路から若者3人組が現れた。残り物の魚の佃煮をあげるとなんと冷たいウリが差し出される。ナイフで皮をむいて切り分けてサービスしてくれた。

戻って、行きに確かめておいた雲吉山駅への道標12:55について下ると、なんとお寺からの階段登山道に合流してしまった。キツネに化かされた気分だ。そのまま下れば、思った通り登り始めた不二門の先の階段登山口13:13だ。

さて、下山路は? と登山地図を見ると広い車道下りでも駅には行かれるが駅より2km近く遠い地点に下りつくようだ。元来た道の方が駅に近い。案内された巻き道をとって見覚えの尾根13:30に戻り着く。そこからは尾根通しの最もよく踏まれた道を選んで下る。地図に赤線が入っていない踏まれた尾根道を「登った道とは違うな」と思いつつ進む。やっと同方向を指す道標「雲吉山1.3km お寺0.78km」13:50を見た。左手へ下る道を見送り、いっこうに高度をさげない尾根道をさらに進む。14:00下りにかかり8分後、左ヘジグザグに下り幅広の土道14:12に下りつく。登りの男性と行き違い、舗装車道に出ると向かいには切株ベンチの広場(14:20~25)だった。ウルシの植林地をみて車道を下る。

いよいよ名物のウナギを食べる所を探そうと最初に

見つけた集落の角のウナギ加工所に飛び込み、食べる手真似をすると若者が車で食堂に連れて行ってくれた。そこは行きに車道を上り始めた地点の角だった。ここへウナギを卸しているのだろう。卓に炭火が入り、網の上に切り分けた2匹のウナギがながなが乗せられ、しばらく焙ってから切り口を下に立ててさらに焼く。タレの皿にはワサビが添えられている。焼けたウナギをタレに漬けてワサビを添えて、レタスやエゴマの葉っぱに置き、針ショウガを乗せてからくるんで口へ運ぶ。これは、いける。おいしかった。(14:40~15:20、2人前64,000W)

帰りは雲吉山駅1548発の電車を清涼里の1つ手前のフェギ回基駅で1号線に乗り換える。小さい駅なので乗換通路も短く分かり易かった。ホテルには17:00過ぎに帰着。コンビニでアイス購入(1,800W)友人が日本から持参した即席焼きそばを夕食にする。

■5月30日金曜日晴

荷物をロビーに預けて、8:00南大門市場見物に出かける。市場はビルに開発中、食べ物を売る店を求めて歩き回ると同じ商品を扱う小さな店が立ち並んでいる。うどん屋横町では座って食べるように勧められるがおなかはずいていない。S姉が「食べたかった」とブドウを買ってきたので、シャッターの閉まっている店の前で立ち食い。その横の肉まん店で買った饅頭をKさんが分けてくれる。

歩き回るうちに土産物店街に出合い、友人は韓国絵模様ナンデムンシジャンの透かし彫りのしおり(@2,000W)をいくつか買っていた。わたしはイチジクの乾燥果実に珍しさを覚え、1袋10,000Wで購入。その店に引き込まれ、Tさんは五味茶を、私とS姉は蜂蜜入り柚子茶(1箱20本入り15,000W)を購入。10時過ぎにホテルへ戻り、お土産を含めて改めて荷造りして10:30空港へ向かう。地下鉄市庁駅への道すがら、最後に買おうと決めていた落花生(1袋2,000W)を露店で購入。

市庁駅から仁川空港行きのホームから直通電車に乗車、空いている。座って安心していると途中駅止まりだったのだ。第1空港ターミナル駅で下車、空港まで結構歩いて、搭乗手続きを終えて残金で昼食ムルメンミョンとハンバーグ添え(@15,500W)を食す。それでも一人22,500Wの戻り金があった。

15:10発イースター航空ZE603便は成田17:30着、21:00過ぎ帰宅できた。(完)

ジャン ジ 雀児峠への道

佐々木健之

2018年7月黄河源流の訪問の帰りに四川省甘孜チベット族自治州の馬尼干戈という辺境の街まで戻った。ここで1泊して高所の峠「雀児峠」を往復する予定だった。「ボンポリトウヒレン」という希少植物が咲いている期待もあった。

「雀児峠」は、四川省とチベットを結ぶ交通の要衝である。近くに名前の由来である雀児山(6168m)がそびえて、鷹も越えられない山との異名がある。標高5000m近い峠道なので、冬の降雪や、土砂崩れなどがあれば通行止めになってしまう。実は「峠」という漢字は中国には無くて、日本で作った文字(国字)である(良くできた文字だと思う)。

交通の難所なので、中国当局はここにトンネルを穿つことになり工期2012~2017年で完成した。全長7079mと従来の山越えの道からすると安全かつ早く峠越えができるようになった。しかしトンネルは便利だが、旧道からの絶景は見られなくなってしまった。ほとんどの車はトンネルを通るので、いずれ峠越えの道は廃道になってしまうだろう。私たちが行った2018年7月はまだ通れたので峠越えの旧道を行って高山植物の撮影や、展望写真を撮ろうと考えた。

中国の峠道はどんどんトンネル化が進んでいるので、旧道は廃れるだろう。

7月12日に雀児峠入口の街、馬尼干戈に泊まり、朝を迎えたが、天気悪く雨。大川さんの説だとういう天気は昼頃になると晴れることがある。ということで昼食後出発。小雨の中、我々の車2台は、国道317線(川蔵公路北線)を「徳格」方面に向かう。しばらくは快適な舗装道路だった。だがこのまま直進すると、トンネルで山越えしてしまう。山並みがさらに間近になると、未舗装の道が右手に現れてこれが旧道らしい。これを進む。旧道の入口に立っていた少年が我々に向かって何か叫んだ。「道が違うぞ」と教えてくれたのかも知れない。

旧道は砂利道だが、もと国道だけあって日本によくある「林道」よりは広い。路面が傷んでも修復の必要がなくなったせいか乗り心地は悪い。始めのうちは、氷河で削られた広いU字谷を右奥に向かって進む。天気はあまり思わしくないが、ときおり雲間



はまり込んでしまった



峠を目指して歩く

から岬々とした雪山の遠景が見えて、すばらしい。峠に着けばもっとすばらしいだろうと思った。

随分奥行きのある谷だったが、やっと谷の奥へ走り込むと今度は、左上へ曲がるヘアピンカーブで山腹を斜めに高みを目指した。氷河地形のひろい谷間は一面草原で、あちこちにヤクが放牧されている。

車はヘアピンを重ねて、順調に距離と高度を稼いでいったが、とうとうおそれていた土砂崩れに道を塞がれた。涸れ沢が大雨のとき崩れたのだろう、大岩、小岩と土砂が道路に散乱している。

しかし車から降りて、路面を見れば、土砂の小石のあいだを選んで、車が通ったタイヤ跡がある。四輪駆動なら大丈夫そうだったが、わが車は4輪駆動ではない。我々一行は中国製「五菱宏光」の6~7人乗りの乗用車タイプの車2台だ。全員で運転手を入れて9人。私は2台目の白い車に乗っていた。先行した鄧さん運転の茶色の車が、試しに土砂崩れの現場に乗り入れた。

最初の泥山はうまく乗り越え、すぐ先の安全地帯まで通過できるかと思ったが、次の泥に後輪がはまり込んでしまった。

全員下車して、車を後押しした。けれども後輪は、回るけれど推進力にはならないで、むなしく地面をえぐった。結果として車体はさらに沈んでいった。

雪国の新潟県にながく赴任経験のあるKさんが、沈んだタイヤを見立てて、これはスコップで掘り出さないといけない、と診断した。けれどもそうした道具は積んでいなかった。

ジャッキを入れて持ち上げようと試みたが土台が泥なので無理。さらにバックで脱出を試みたりしたが駄目だった。困り果てていると、下から登って来る車があった。車種は四駆の「トヨタプラド」。現地生産なのか「一汽丰田」と車体に書いてあった。大川さんの話だと、地方政府の公用車などに採用されて人気があるそうだ。今回の旅行中も随分見かけた車種である。こういう悪路で本領を発揮するのであろう。

トヨタプラド車は夏休みの家族旅行なのであろうか、運転手が降りてきて、泥にはまった車を見ると、スコップを出し、何やら鄧さんに指示を出した。スコップで地ならしをすると、うまい具合に泥から脱出できた。颯爽と現れた「トヨタプラド」は峠の方へ消えた。

ところで、鄧さんの車は泥濘から脱出できた。進むか、戻るか？ ここで、年長者のKさんが、

「この先、同じような土砂崩れ箇所があるかも知れない、危険なのでここで帰りましょう」

一方、冒険者タイプのH姐は、

「ここまで来て、戻りたくない」

という。あいだに挟まれて大川さんは困惑の顔だったが、誰ともなく峠までさほど遠くないので、

「歩きましょう」

ということになった。

運転手の鄧さんが先頭に立ち、私、H姐、I姐の合計4人で、ボンボリトウヒレンを探しながら峠を目指して歩いた。他の5人は車を止めた土砂崩れ現場で待つことになった。

歩き出して直ぐに分かったことだが、標高4000mを越えていると思われるので、高度障害で息苦しい。普通に歩くことも結構つらい。まして緩い坂でも心



午後5時到着、標識のある「雀児峠」

肺がパクパクしてしまう。鄧さんは丹巴在住(1800m)なので、高地には強かった。道はかなり長い直線部とへ短いヘアピンを繰り返しているの、歩いて高度を稼ぐには効率が悪い。そこで日本の山でもやるように、ヘアピンをショートカットすることにした。

道路の山側は、土手になってすぐ上に、ヘアピンから斜上する道が見えている。だから土手を這い上がり、草付きの斜面を登り始めた。ものすごく息が切れる。それでもやっと上の道路に出れば、鄧さんたちよりずっと先に出た。やったぞと思って鄧さんと、それに続くH姐、I姐を待つことにした。鄧さんはすぐに近くまで来たが、後続が来ない。遅いなあ、と思いつつ立ち止まると、何と我々の車が登って来るではないか。

それは、もう一人の運転手若い楊さんが運転していた。すでに車中には拾われたH姐、I姐がちゃっかりと乗っていた。鄧さんのところでも止まり彼も乗せた。続いて私も乗せてもらった。思うに楊さんは行けるところまで行ってみようと思ったのであろう。結論として、峠までの道路状態は問題なかった。

峠まではほんの数分で付いてしまった。歩いたら1時間はかかったかも知れない。

たどり着いた「雀児峠」は岩屑の堆積した岩陵に囲まれた、寂しいところであった。石造りの標識が有り「雀儿山」と大きく書いてある。どうして峠なのに近くの山の「雀儿山」と大書きするのか分からない。ともあれ「雀児山」は6168mで、「此处は5050m(グーグルアースだと約4900m)」と書いてある。

峠には長居をしないですぐに、もう一台の車の待つ土砂崩れ現場まで戻った。こうして無事に宿に戻った。ボンボリトウヒレンは無かった。

今年のあさおサークル祭では、『論語』から学ぶ言葉の力—その三《恥》をテーマに元桜美林大学教授・植田教授による論語のお話を聞きました。

論語とは中国の春秋時代に活躍した儒家の祖である孔子とその弟子たちの言行を、さらにその弟子たちが書き残した書物です。成立年代、編集者は不詳ですが、孔子の時代は今から2500年前、日本では縄文時代に当たります。はるか大昔なのですが、論語は今なお読み継がれていますし、その内容に古さを感じるよりむしろ、新鮮さを感じる不思議な書物です。

今回取り上げられました「恥の文化」と言えば、何となく日本人独自のものではないかというイメージがありました。ところが論語の中で、孔子が理想として語ったことであり、江戸時代、朱子学を通して武士道と重なって深く日本人に浸透したようです。

論語の中で、植田先生が取り上げられた恥についての記述は、5か所もありました。原稿用紙にしてたった34枚という論語のなかでは、多いのかもしれませんが。そのうち特に印象深かった二つを以下にご紹介しますね。

子曰：「道之以政，齊之以刑、民免而無恥。道之以徳、齊之以礼、有恥且格。」

子曰く、これを導くに政^{まつりごと}を以ってし、これを^{いととの}齊^{たみまぬか}うるに刑を以ってすれば、民免れて恥なし。これを導くに徳^{とく}を以ってし、これを^{いととの}齊^{かつただ}うるに礼を以ってすれば、恥有りて且格し。

「国民を導くために政策を用い、また治めるために刑罰をもってすれば、国民は法律の穴をみつけるでしょう。しかし。徳をもって国民を導き、礼をもって国を治めるならば、国民はその身を正すようになりましょう」ということですが、中国に

は「上に政策あれば、下に対策あり」という有名な言葉があるように、ルールと刑罰で縛ろうとしても難しいことは歴史が証明しています。

子曰：「古者，言之不出，恥躬之不逮也。」

子曰く、古者^{こしや}、言^{げん}の出でざるは、躬^みの逮^{およ}およばざるを恥ずればなり。

「古人は軽々しく物をいわなかったが、それは実行のともなわないのを恥じたからだ」という意味

ですが、植田先生の解説によると、「話を大げさに盛るのを一番恥ずかしいと思うのが本当の君子（人の上にたつリーダー）だ」ということです。春秋の時代は、思想家が自論を大きく盛って各国を遊説し自分を売り込んだ時代、今もまさに世の中には、サービスや効果を盛って売り込む手法が蔓延しています。現代はそういう意味で、春秋時代に通じる社会背景と言えるかもしれません。また、今の時代は、ルールで縛れなきゃ、デー

タで縛ろう、とばかりに、中国では、駐車違反をはじめとして個人の色んなデータを取られる時代になりました。しかし、やはり、犯罪はなくならないわけで、根底に「捕まらなきゃ良いんだ」という考えがまかり通ってしまえば、社会の秩序は守れないということの証明である気がします。個々人が、わが身の振る舞いを振り返り、「恥ずかしいことだ」と感じない限り、他者や法律・ルールによって人は縛れないものだと思います。

他にも、「本当はコノヤローと思っているのに、利益だけで友人として付き合うのは恥」「君子は行動より言葉が先行してはいけない」など、日本人の感覚にすんなりと合う内容でした。

植田先生は、日本人の恥の感覚は、江戸時代に論語好きの徳川家康が儒教を熱心に学び、臣下たちも伝えていったことが武士道精神の中に浸透し





ていった、それほど論語は日本人に親しまれ、精神として溶け込んでいるとお話しされました。確かに、「恥」の文化は、少なくとも弱肉強食の中国よりは、和を尊しとする島国の日本人の方に親和性があると感じます。

さて、植田先生は時々、ご自分の頭の中で国際会議を開いていらっしゃるそうです。

そこには、あらゆる時代の中国人が参加していて、一つの問題を各時代の人物が意見を出し合っ

て話し合うのだそうです。

「また、あらゆる年代の自分を参加させる会議なんかもやりますね。若い時の考えを振り返ると、あの時は何にも分かっていなかったな、と思ったりします。今年、私は82ですが、もしあと10年生きられたとして、92になった私は、82の時のオレは全然分かってなかったな、なんていうことになるかもしれませんね。」というお話は、とても新鮮でした。

言うまでもなく、歴史上の登場人物が空想会議でイキイキと発言するには、その下敷きとなる膨大な知識が必要なことは言うまでもなく、植田先生の凄さに改めて尊敬を感じました。

「歴史は現在と過去の対話である」E・H・カーという名言がありますが、植田先生にとっては、「論語は現在と過去の対話である」なのでしょう。

今年の論語講座も得るところの多い素晴らしい講義でした。

あさおサークル祭 〈ボイストレーニング〉 講師:Emmeさん

2019年7月7日(日) 川崎市・麻生市民センター

今年もEmme先生のボイストレーニングを行いました。昨年と違い、午前の「論語」の講義の後、同じ会場で、午後1時半から始まりました。昨年は会場が狭かったためか14名の参加でしたが、今年はなんとその3倍の42名の参加で広い会場も手狭となり、用意した資料も急遽増刷する次第。

皆さんの熱気の中で、先ず十分なストレッチを行い、Emme先生の発声を見習いながら低音から高音部まで何度も練習です。次第に声が出るようになって皆さんも嬉しそう。その後「夏の思い出」を元気に歌い、3時にお開きとなりました。皆さんは満足そうに会場を後にされました。

(報告：寺西)



この度ご紹介するのは、向ヶ丘遊園を拠点に中国語学習を中心に中国文化などを語り合うグループ「多摩の会 12」です。男性 7 人の会ですが多士済々でそのうち 3 人はわんりい会員であり、いわば親戚筋に当たる仲でもあります。以下同会からの自己紹介です。

「多摩の会 12」は、毎月 1 回、向ヶ丘遊園駅南口から徒歩 3 分の所にある喫茶店シャノアールで中国語や中国文化・歴史の勉強をしている市民サークルです。メンバーは、“悠々自適”のサラリーマン OB で、2012 年から活動し（従って会の名称は 12 を加えています）、7 年目になっています。まずは 1 時間程、1 か月間の身の回りの出来事や趣味などについてフリートークします。日本語です（笑）。そのあと 1 時間が勉強。順番で回って来る担当者が準備した中国語のペーパーなどを配り、真面目に勉強します。現在 7 名ですが、休んでも誰からも叱られません。入退会自由。女性歓迎。会の運営も皆で相談しながらやっ



ています。合言葉は“友誼第一、学習第二”。次回は、9 月 26 日（木）午前 10 時から。良かったら覗いてみませんか！ 熱烈歓迎します。

- 日時：毎月第 4 木曜午前 10 時～正午
 - 場所：『コーヒーハウス・シャノアール向ヶ丘遊園店』のミーティングルーム（☎044-932-1103）
 - 会費：1 回 1000 円（各人の飲食代とルーム使用賃）
 - 連絡先：後藤芳昭 ☎080-5521-6698
- E-mail : goto728179@beach.ocn.ne.jp

★次回からは、メンバー交代で愉快的な文を寄稿していただく予定です

▼9 月の定例会 9 月 10 日(火)…13:30～ 三輪センター第三会議室

▼10 月号発送日 10 月 3 日(木)…10:30～ 三輪センター第二・第三会議室 ※ 弁当を持参ください

【ご冥福をお祈りします】

‘わんりい’会誌に「東西文明の比較」を寄稿頂いておりました塩澤広宣氏が、7 月 15 日他界されました。

2011 年度の町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業として、‘わんりい’企画の「つなげよう 広げよう 地域の『輪』と『和』」と題する留学生紹介事業が採用され、新聞記事になったことで塩澤氏と知り合いました。好意的な眼差しで‘わんりい’の活動を見続けて下さり、以来、55 回に亘って‘わんりい’会誌に寄稿くださいました。氏の寄稿は、‘わんりい’HP「会員と関係者の楽しいエッセイ」に纏められています。 (田井)

‘わんりい’ 246 号の主な目次

寺子屋・四字成語(25) 鞠躬尽瘁……………	2
論語断片(49) 身を殺して以て仁を成す……………	3
「遼陽」という街(1)……………	4
四姑娘山写真だより(46) 女王谷の神々(4-最終回) 番外編：チベット仏教ニンマ派の壁画……………	6
「漢詩の会」(32) 杜甫「曲江二首」……………	7
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑤）……………	10
台湾一周&玉山登山ツアーレポート①……………	12
3 度目のソウル近郊ハイキング(下)……………	14
雀児峠への道……………	16
あさおサークル祭〈講演〉 「論語」から学ぶ言葉の力・その三《恥》……………	18
あさおサークル祭〈ボイストレーニング〉報告……………	19
「多摩の会 12」紹介……………	20